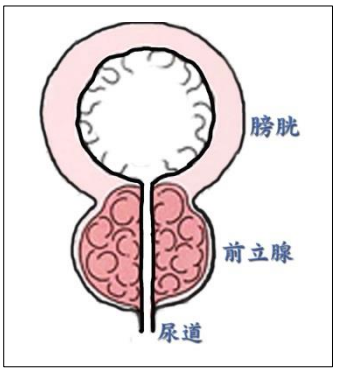
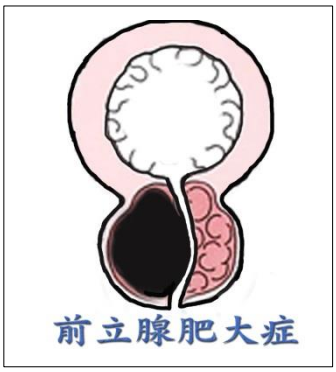
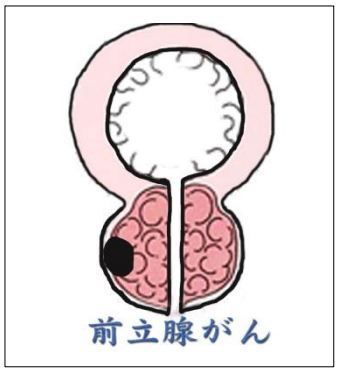
50歳を過ぎたらPSA（前立腺特異抗体）検査を

いま前立腺がんがどんどん増えています。これは、人口の高齢化と食生活の欧米化によるもので、前立腺がんにかかる方が 2004 年では 17 人に 1 人だったのが、2025 年には 6～7 人に 1 人に増加すると予想されています。桐生厚生総合病院で、20 年前は年間 15 人くらいでしたが、最近は毎年 50 人から 60 人の方が前立腺がんと診断されています。

前立腺の大事な役割は前立腺液を分泌し精液を液状化することです。この前立腺液の中の酵素がPSA（前立腺特異抗体）です。前立腺がんになるとPSAが早期から多く血液に分泌されるようになり、血液検査だけでどのくらい前立腺がんの心配があるかがわかります。PSAが 4 以下の場合、がんになっている可能性は 20%以下で、4～10 の間では 30～40%、10 以上では 50%以上の方に前立腺がんが見つかります。また、PSAが高いほどがんの可能性が高くなるだけでなく、進行がんの割合が増えてきます。







前立腺の病気では、前立腺肥大症が有名ですが、肥大症は尿道に近いところで発生するため、尿勢が弱くなったり、夜間排尿に起きるようになったりといった自覚症状がともないます。一方、前立腺がんは尿道から離れたとこで発生するため、早期ではほとんど自覚症状がありませんが、この段階でもPSAでは異常が出ることが多く、ほとんどは早期がんです。しかし排尿障害や血尿などの症状のため受診した場合、リンパ腺や骨に転移した進行がんになっていることが多くなってきます。桐生地区で毎年 20 名前後の方が前立腺がんのために亡くなられていますが、8 割以上が症状が出てから受診された方です。

前立腺がんは早期で発見できた場合、手術・放射線・薬・経過観察などいろいろな治療法が可能で、前立腺がんで死亡する心配はほとんどありません。自覚症状がないから前立腺がんの心配はないと思っているあなた、大間違いですよ。50 歳を過ぎたら、1 年に 1 回かかりつけの先生や健康診断でPSAを測ってもらってください。

【泌尿器科診療部長　登丸 行雄】